

通訳の原理に関する省察(上)

近藤正臣

(大東文化大学名誉教授)

Contemplating on the fundamental interpreting process essentially amounts to revisiting the 'sense' theory of Danica Seleskovitch (& Marinne Lederer), and the 3-party 2-language communications model of Hella Kirchhoff and of M. Kondo. This first part of the essay attempts to deepen the sense theory, and refute the oft-made criticism against the de-verbalization phase in Seleskovitch paradigm by, among other points, a very useful tool privately proposed by F. Pöchhacker of establishing different categories of 'senses' and 'das Gemeinte' and placing them along a continuum. The second and last part of this essay (to appear in the next issue of this journal) will posit that there are several additional statements that Japanese-speaking interpreters should propose, and will describe them substantively.

1. はじめに

「通訳翻訳研究」と改名された学会誌の、しかもその第12号で通訳(その行為・プロセス)の原理について省察を試みるのは、やはり時宜を得たものであろう。そうなると通訳行為の *mental process* を最初に説こうとした「意味の理論」を想起せざるをえない。つまり、通訳者は個々の単語を置き換えるのではなく、「通訳者が伝えるのは意味だ」とした理論である。これを最初に唱えたのはセレスコヴィッチで、その著書が(Seleskovitch; セレスコヴィッチ)である。畏友ポエヒハッカー(ポエヒハッカー 私信による)は、これが現代の古典になっていると言う。フランス語の原著がでたのは1968年であるが、英語版(1978年)があるにも関わらず、2006年にドイツ語訳が出て、2009年には邦訳が出版されているのはこのことを十分に示しているのだろう。

また、キルヒホーフの「3者2言語モデル」(1976年)は、筆者がモンテレイ大学院大学の通訳科創設20周年記念行事(1989年)に出席した時に、「通訳者の間でもっとも広く受け容れられているモデルです」と、AIICの調査部長(当時)、ジェニファ・マッキントッシュさんが紹介していたのを覚えている。キルヒホーフのモデルは、通訳者が伝えるべきものを *das Gemeinte (that which is meant=意味されているところのもの)* としていて、やはり通訳者は意味を伝えると規定している。

僭越ながら筆者も、1981年に通訳者のしていることをモデル化しようと苦心していた。だが不覚にも、当時はまだセレスコヴィッチもキルヒホーフもその名前さえ知らなかった(彼らの著作を知ったのは、上記モンテレイのシンポジウムに参加した時であり、ここで受けたショックから通訳理論研究会を立ち上げ、さらには大東文化大学大学院経済学科での通訳者養成にまでこぎつけたもの

ある)。そして、話し手と聴き手の間に通訳者を置き、通訳者とは——平たく言えば——「ははあ、この人はこういうことが言いたいんだな」と解釈できたものを伝える存在なのだと考えるにいたった。これがいわば、「近藤版3者2言語モデル」である。

以下、まず、セレスコヴィッチ、キルヒホーフ、近藤の通訳に関する3モデルを確認し、セレスコヴィッチ理論で通訳行為の第一段階として提起された非言語化のプロセスとこれに対する批判について議論を深めたい。まずは先人の努力の意味を確かめつつ、同時に日本における現代の「通訳の原理」の出発点を模索したいのである。

2. 意味の理論

2.1 セレスコヴィッチの意味の理論

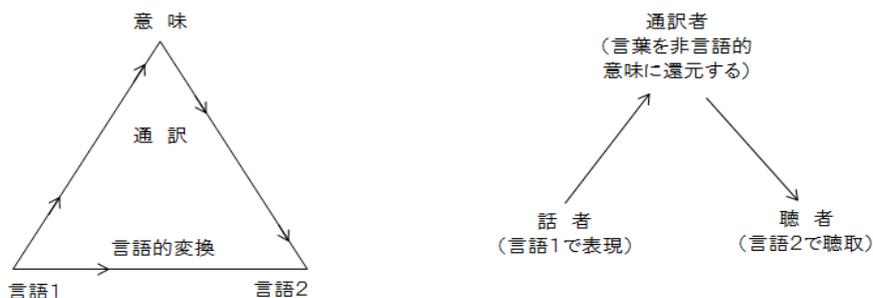
セレスコヴィッチの(セレスコヴィッチ)に寄せた序文で、ソルボンヌ大学のモーリス・グラヴィエ教授は、著者の執筆動機をこう理解している。すなわち、通訳者の仕事が翻訳者のものとは違うこと、通訳者はあつという間に元のスピーチを分析し、目標言語の特徴に合わせて再構築する、この「奇跡のような仕事」ができるのはなぜかという問いにセレスコヴィッチは答えをそうとしたのだ、と。セレスコヴィッチの論点のいくつかを見てみよう。(以下、セレスコヴィッチからの引用は、邦訳を参照しつつ、英訳版から訳出したもので、ページ数も英訳版のものを示す。)

セレスコヴィッチはまず、逐次通訳を「防音ガラスを挟んで対面し、同じ言語で話そうとするふたりが、3分間くらいずつ話すのを仲介する」作業にたとえる。つぎに同時通訳を「スポーツの実況中継をするアナウンサーが見ているものを連続してことばで表す作業」にたとえながら、その本質を示そうとする。また、どの言語にも同じ意味分野をもつ単語が必ずあるというのは、近代言語学では誤った考えと証明されていることにも言及している。そのうえで通訳の本質は、意味を明らかにし、それを他の人に解説することだと言う。この意味で通訳者は——セレスコヴィッチの考えでは——楽譜の意味を明らかにする演奏者、あるいは台詞の意味を明らかにする役者と同じなのだ。いい演奏家、役者がこれを行うほど、メッセージは聴衆によく伝わる。また、通訳はコミュニケーションであって、「聴く人がそれを理解できなくてはならない」(accessible to the listener) 点も強調している。

もちろん、起点言語における1語を目標言語における1語に対応させること(1語1語の対応)が、通訳の本質的な作業であるなどとはどこにも書いてない。

まず、セレスコヴィッチが1962年という早い時期に通訳のメカニズムを示すものとした3角形プロセスを見ておこう。

図1



(Pöchhacker, 2004:97; ポエヒハッカー、2008:114)

つまりここでは、通訳者の作業は言語的な変換(transcoding)ではなく(固有名詞や専門用語などを除く)、いったん、言語 1 を意味までもっていき、それをふたたび言語 2 まで下すものだ、と言っているのである。ここでは通訳者は、reducing words to nonverbal sense(邦訳では、「言語を非言語的意味に還元する」(鳥飼、114 ページ)としている)とし、この「意味」は言語を伴っていないと読めるもので、後年にはこの非言語化の段階への批判を引き起こすことになる。

セレスコヴィッチは通訳者が 3 段階のプロセスを経て通訳を行うとする。つまり、次の 3 段階の mental processes を通して、意味(あるいは semantic content)をほぼ同時に伝えることが可能になるという。

- a 意味を持つ発話を耳で聴いて認知し、言語を理解し、分析・解釈してそのメッセージを理解する。
- b 直ちにかつ意図的に(deliberately)、wording(文言・言い回し=使われている個々の単語・言葉づかい・表現)を捨て、そのメッセージに示された概念・アイデアなどを mental representation として保持する。
- c 目標言語で新たに発話する。この発話の持つべき要件にはふたつあり、①元のメッセージの全体を表現していること、②受け手に合わせることである。

(Seleskovitch, 1978: 9)

ここに言う mental representation(邦訳では「心的イメージ」(セレスコヴィッチ、2009:10)もまた、うちに言語を持たないイメージ、amorphous で雲のようなものともとれ、これも非言語化段階モデルを批判する際の根拠となりうる表現である。

なお、(水野、1997:54)によると、セレスコヴィッチはその後(1989年)に Lederer との共著において、「意味」の意味を精査し、linguistic meaning と、「その諸要素と言語外の知識を融合させて得られる sense」とを理論的に区別しているという。本稿でも、この区別を援用して sense は<意味>と表示しよう。余談だが、Lederer はその後この理論を翻訳に適用して、実にユニークな翻訳論を提示している(Lederer, M.)。

セレスコヴィッチは、これら 3 段階のプロセスはこの順序で起きるのではなく同時に起き、どの部分がどのくらいの比重を占めるかは<意味>のタイプによって異なるとする(Seleskovitch, 1978:10)。

さらにセレスコヴィッチは続けて音声言語の特徴を論じる。まず、音声言語(spoken language)は spontaneous であると言う(ここでは手話通訳は視野に入っていないので、ここに言う音声言語は手話言語と対照されるものではなく、書かれた言語と対照されている)。人が spontaneous に発話する場合、話しは始める前には言いたいことをどう表現するかは、現実には口を開いて話し始めるまでは厳密には分からない。どの単語を使うかを決めるのは、①だれに語っているのか、②どのような文脈・状況で語っているかで決まる。これをセレスコヴィッチは「言語表現の spontaneous な側面」と呼び、これこそが音声言語の特徴であるとする。そしてこのことゆえに、言わんとすることの意味に集中し、どのような単語を使うか、どのような言い方をするかは人為的に決めるというより、口から出るのに任せておけば自然に決まってくるという。逆に、厳密な形を自分で考え始めると、つ

かえたりしてしまって、誤解されることになる。これは当然、通訳者が目標言語で spontaneous に発話して、これが自分の通訳だとするもの(最終成果=end product)とする場合にもあてはまると考えられよう。

また、音声言語は spontaneous だということから、聴く人が多ければみんなに聴こえるように大きな声で話し、聴者にとって初めての情報だと思えば、ゆっくりとはっきりと話すようになる。さらに音声言語は話しているうちに「考えるのに役立つ」と言う。つまり自然に・即興的に話すという行動は、思考過程そのものを反映しているのである。セレスコヴィッチはここでは触れていないが、話し手が前もって原稿を用意し、これを読みあげるだけのときには、この音声言語の特徴が失われるため、かえって通訳がしにくくなるのが往々にしてある。別の工夫が必要になる。

続けてセレスコヴィッチは、発話とそこから意味を理解するプロセスについて述べる。音声は、発せられた瞬間に消えてしまうので、通訳者は瞬時にその意味を理解しなくてはならない。3 分くらいの発話があるとおよそ 300 語の単語が発せられるが、この 300 語の個々の単語(のほとんど)や、それが使われた時の発音上の抑揚などをすべて覚えておくことは不可能である(このような記憶力を持っている人はいるのであろうが、これは、たとえば 20 階建てのビルに入っている会社名などを写真に撮ったように記憶してしまうとか、町のある一角に住む人たちの名前をすべて覚えてしまうという photographic memory に類するものであり、通訳者はこの種の記憶力をもっているのではないと言うことであろう)。しかし、<意味>は消えず、あとまで残る。だからこの<意味>を伝えることが可能となる。

さらにセレスコヴィッチは次のように言う——「耳で聴くと、個々の単語から意味を分離できる。耳で聴く場合、意味はとどめておいて、具体的な文言 (wording) を忘れることができる。これは通訳者にとっては有利である。単語に邪魔されずに、意味に集中できるからだ。……意味の分析に経験を積んだ通訳者にとっては、話し手の言うことを一度だけしか聴けないということは有利なのである。数千とは言わないまでも、数百の単語のつながりに意味を見出そうとする者にとって、このように単語は通訳のプロセスを妨害するものではあっても、手助けになるものではない」とする (Seleskovitch: 1978: 16-17)。

3 分間くらいの逐次通訳をするときに、そこで使われる個々の単語すべてを、そのアクセント・韻律まですべて覚えていては、たしかに通訳の邪魔になろう。ここに使われているキーワード間の関係が把握できれば、他の単語をすべて覚えているのは通訳のためにはかえって有害である。このことは、実際の日英通訳の体験から十分に納得できる。

2.2 キルヒホーフの 3 者 2 言語モデル

冒頭で紹介しておいたキルヒホーフのモデルは、次の図を見るのが分かりやすい(このモデルを英語で解説をした (Kondo, 2003) が参考になるかもしれない)。

図 2 Kirchhoff's diagram depicting her three-party two-language model

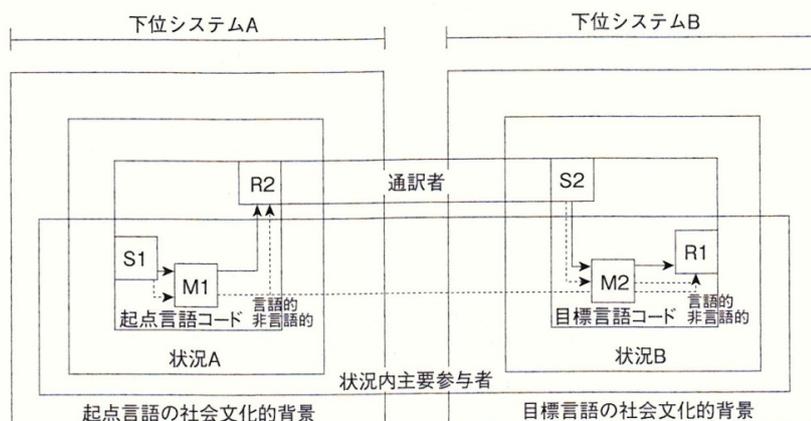


図5.7 キルヒホフの三者二言語コミュニケーションシステム・モデル (Kirchhoff 1976:21)

(ポエヒハッカー 2008:109)

システム A は話し手のコミュニケーション・システム、システム B は聴き手のコミュニケーション・システムである。直接にこのコミュニケーション状況に関わる主要参与者 (第一次参加者) は話し手と聴き手で、この両者は異なる言語および非言語の code と社会文化的背景をもつ。その間に立って橋をかけているのが通訳者で、この両システムを理解するが、どちらとも自分を同一視せず、直接的関与をもたない。

この図について、ポエヒハッカーは次のように解説している。

「言語」と「非言語」で構成されるメッセージ (M1) は、第一次送信者 (S1) により、特定の状況と社会文化的背景に従って記号化される。そのメッセージは、目標言語コンテキスト内の第一次受け手 (R1) により受容される。二つの部分からなるコミュニケーション・システムは、通訳者によって結びつけられる。通訳者は「副次的参与者」として主要参与者の場の外に位置する者として描かれ、M1 の第二次受け手 (R2) と、目標言語コードにおける M2 の第二次送信者 (S2) という両方の役目を果たす。(ポエヒハッカー 2008: 108)

キルヒホフはこの 3 者 2 言語間にいくつかの興味深い関係があることを指摘する。たとえば、話者は通訳者を頼りにする心理的状况に陥り、聴き手は選択的に聞く (興味のある点に特に耳を傾け、他のところは軽視・無視する) が、通訳者は入ってくる発話全体を扱わなくてはならないと言う。さらに、通訳者は自らが持っている意見・趣向・想像などをその通訳に反映させてはならないと言い、コミュニケートされるのは *das Gemeinte* (that which is meant) であるとする。これは、機能的・コミュニケーション上において元の発話と等価でなくてはならなくて、formal な意味で等価ということとは異なる。つまり、*das Gemeinte* はセレスコヴィッチの言う「意味」と同じだとしてよいだろう。さらにキルヒホフは、2 言語・2 文化的環境の間の収斂と相違 (英語に置き換えれば *convergence* と *divergence*) があることについて 1 文だけ述べる。

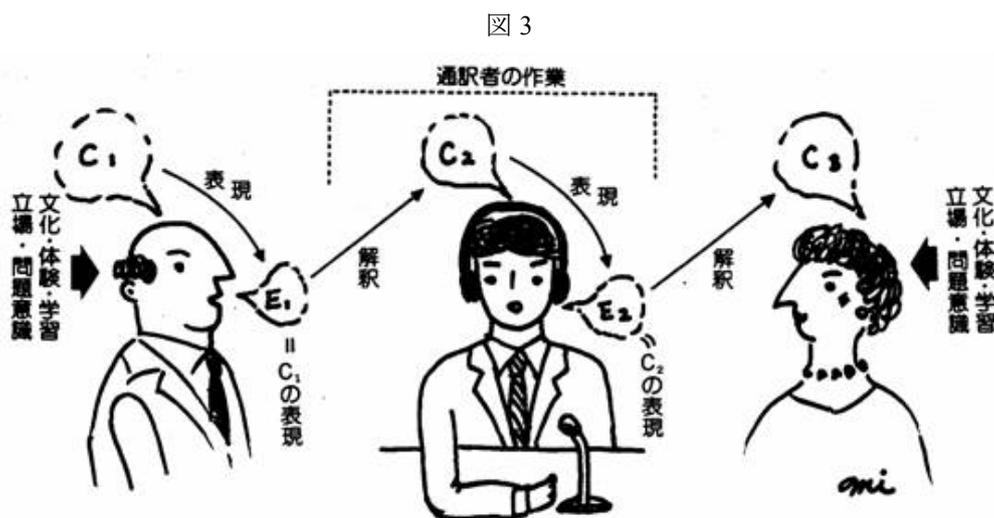
ここで重要なのは以下の2点だと考えられる。ひとつは、通訳者はコミュニケーション状況の中の不可欠の参加者であり、単なる機械ではないということ、通訳者が入って初めてコミュニケーションの過程が開始されるということである。もちろん、だからと言って通訳者がこの場におけるヒーロー・ヒロインというわけではない。それにしても「通訳者は、多くの人の手助けがあって初めてその役割を果たせることを認めるくらいは、*dignifiedly and proudly humble enough* (凜とした謙虚さをもつ)」てよいと筆者は考えている(Kondo, 2003: 80)。

いまひとつは、元の発話は一本筋に、そのまま目標言語による発話つまり最終成果(end product) になるわけではない。いったん通訳者の頭に入り、そこで *das Gemeinte* が把握され、続いてそれが第2の言語＝目標言語において再生されるということである。つまり1語1語の対応は無関係だということである。

「英語がペラペラなら通訳なんてだれにでもできるだろう」という、今でも流布している誤解はさておくとしても、以下のような錯覚は日英語間の通訳においてさえ、容易になくならない。この錯覚とは、通訳者の仕事は起点言語の発話における1語を目標言語での1語にすごいスピードで対応させる自働機械(automaton)の仕事で、これが「正確な」通訳であって、そうでないのは「意識」であり誤魔化しなのだ、というものである。1語1語の対応(word-for-word correspondence)は理論的にも現実的にも不可能であることは、たとえば、意味論の初歩である「1語1義の誤謬」から簡単に説明できるが、今でも必ずしも十分に理解されているわけではない。つまり、意味論の基本的な知見として、「ある単語が、常に、あるひとつの意味を持っている」と考えるのは誤りだとするのである。これが起点言語・目標言語の双方に言えるのであるから、この2言語間で、つねに同じ意味をもつ単語1語を当てることはとてもできることではない。

2-3 近藤版3者2言語モデル

1981年に提起した筆者のモデルには、以下のような図がついている。



(近藤正臣 1981:29)

このモデルの説明として筆者は以下のように述べている。いささか長くなるが、その全体を引用す

る。これでそのモデルの意味がほとんど自明なものとなるからである。

発言をする人は、自分の文化内における全体験・学習・生まれながらの資質を背景にして、その時の立場・問題意識に基づいて、ある概念C₁を伝えようとする。つきつめて言えば、これはその人自身のユニークなもの、他にふたつとないものである。彼はその概念をたとえば日本語を使って表現しようとする——E₁(その時に使う言語が概念形成上なんらかの役割を果たしているとは私は考えるが、この点については論争がある。また、表現しなくても伝わるのはESP=テレパシーなどだが、ここでは考えない)。その表現されたものを耳にする人は、その人の生来の資質、その全体験を基にしてそれを解釈する——C₂。この解釈も、つきつめて言えば聴き手一人ひとりのユニークなものである。

その聴き手の一人がたまたま通訳者の場合もある。つまり、通訳者の理解する発言者の発言内容 C₂ は、原理的にふたつとない、ユニークなものなのである。通訳者は、そのように理解した内容 C₂ を、たとえば英語で表現しようとする——E₂。その表現もその通訳者独自のものであり、その表現を聴いた人(たとえばアメリカ人、インド人、...)も、自分独自の理解をする——C₃。これでやっと発言者の考えていることが聴いている人まで届いたことになる。

ひとつのプロフェッションを実践している通訳者は、自分の頭の中に C₂ のイメージを得ることがまず必要である。平たく言えば、「ははあ、この人はこういうことが言いたいんだな」ということを、できるだけ的確につかむことである。その際、E₁ の理解が自分勝手なものであってはならない。通訳者として、自分の全体験を総動員してそれを解釈せざるをえないのだが、それでもその解釈を少しでも[正しい]ものに近づけようとして、努力をする(完全に「正しい」ものは、原理的に言って全知全能の神様にしかできない)。ことばをひとことも聴き逃がさないよう努めることなどは初歩の初歩だが、ひとつのやりかたに、社会科学でいう「観点の移行」(=価値自由)というものがある。自分の観点からだけ E₁ を見るのではなく、できるだけ多くの観点からそれを見てみようとするのである。とくに、発言者自身の観点は決定的に重要である(もちろん、発言者とまったく同じ観点、発想に立つことは不可能であるが)。諸分野の知識や発言者の立場、思想などを知るのが重要なのはこの意味においてであるが、そういう手がかりはないことも多い。(近藤、1981:29-30)

ここで「ははあ、この人はこういうことが言いたいんだな」と「平たく」表現しているのは、話し手のもつ文化・体験から時の問題意識までも理解して通訳者が得る<意味>である。つまり、このモデルもまさに「意味の理論」だとすることができる。

引用文中の「価値自由」という概念について、ここで簡単に説明する必要があるだろう。これは M. ウェーバーが社会科学の方法論として述べたもので、*Wertfreiheit* (英語にそのまま置き換えれば *value-free-ness* ということになる)の日本での訳語である。欧米の解説書にはこのウェーバーの方法論について、「科学という営みに関わるときには自分の価値を捨てる必要がある」とされることが多い。この意味では「没価値」と訳される。しかし、日本のウェーバー研究者(ちなみに日本におけるウェーバー研究の水準は極めて高いとされている)は、このようには解釈しない。自分の生涯をかけて社会科学の営みを続けるときに、自分の価値を捨てるとウェーバーが言っているとは考えられないのだ。

日本のウェーバー研究者はこのドイツ語を「価値自由」と訳して、「研究者は、一時的・理論的に、自分の価値から自由になって、他の研究者の価値に立って現象を見て、そこで何がどのように見えてくるかをまず把握しなくてはならない。そして、自分の価値から見えてくるものと比較対照させることによって、真理に一步近づける」とウェーバーは言ったのだと言う。大塚久雄先生は比較経済史を専門としつつ、戦後社会科学の発展に大きな影響を与えた社会学者であるが、筆者が学部の卒業論文の指導を受けた時に「英語では、put oneself in someone's shoes というでしょう。あれですよ。」と解説されたのを鮮明に覚えている。「立場の転換」とされることもある。この意味では、通訳者もこの社会科学の方法を日常的に実践していると言えると思っている。

しかし、より原理的な問題として、C1とC3がすべての側面でまったく等しいということはそもそもありうるのかという問いがあろう。話し手と聴き手はそれぞれ、自分の文化・体験・学習・立場・時の問題意識を異にし、意味を理解する言語を異にしている。通訳者は「価値自由」の方法論を身につけたプロフェSSIONALだとしても、話し手と聴き手は、ふつうはそうではない。ここから、通訳者がいくら「完璧」な通訳をしたとしても、聴き手に理解されるものは approximation でしかありえないという命題が出てくる。また、ひとり通訳者がコミュニケーションのすべての課題を果たせるものではなく、第一次参加者としての話し手と聴き手も異文化間コミュニケーションの諸問題についてかなりの理解・配慮がないと、これに失敗することがあり、第一次参加者はすべてを通訳者にまかせればいいということにはならない、とくに日本人スピーカーの啓蒙が必要とされるのではないかという命題もでてくる。この点については、(Kondo, 1990; 近藤, 1992)を参照されたい。

時として、理想的な通訳として二つの命題が挙げられることがある。ひとつは、①元の話し手が目標言語を話せたならばこのように話しただろうと考えられるような目標言語にすること、いまひとつは、②元の話し手の発話をその言語で聴いた者と通訳者の目標言語による発話を聴いた者が同じ内容・情報・印象を受けるような通訳をすることである。

ここで言う①のやり方は、話し手のもっている文化・体験・学習・立場・問題意識は変わらないが、はじめからその話者が目標言語で話すときには、言語化する言語(あるいは目標言語で話すことがあらかじめ分かっているならば、意味内容・概念を形成するときの使う言語)が異なるのであるから、目標言語による表現はその言語の引いた路線に沿って進むため、表現はおのずから多少は異なってくる。②の方法は、もう少し複雑な問題点を含む。通訳者はプロとして話者の考えていることはよく分かっても、受け手は自分の文化・体験・学習・立場・問題意識でもって選択的に通訳者の発話を聴く。したがって、話し手の言わんとした概念がそっくりそのまま、寸分違わずに受け手の理解したものになることは、①の場合よりも少ないとしていいのではないであろうか。

3. 「意味の理論」批判と擁護

3.1 「意味の理論」批判の内容

このように、通訳者が伝えるのが「意味」であると論じてきて、水野による「意味の理論」批判(水野, 1997)に触れずに済ますことはできない。この水野論文は、周到にセレスコヴィッチの意味の理論をセレスコヴィッチおよび Lederer による数点の著書によって規定し、また、複数の論者の批判を取り上げ、それぞれの論点を整理しまとめている。結論として、「こうした批判に共通しているのは、「Seleskovitch の通訳理論の最大の問題点を『非言語化』deverbalization の段階に見ている」

ことである。「その限りにおいては批判は正鵠をえているということが出来る」とし、「我々は意味は言語表現から独立には存在できないという考えをとる」(水野、1997: 57)と、自らの立場を示している。

水野によれば、多くの論者によるセレスコヴィッチ批判はこのようになる——通訳者がいったん通訳する発話の〈意味〉を把握したら、通訳者は元の発話を *deverbalize* する、「非言語化」するとセレスコヴィッチが述べている、非言語化してしまうのだから、ここに把握できた〈意味〉は言語による表現を持たない、言語中立的な *mental image* だ、これはつまり、機械翻訳機が行うような中間言語によってこの〈意味〉を表現しているものだ、と。これはつまり、「〈意味〉が言語とは独立に存在する、即ち超越的意味 *transcendental meaning* が存在するという立場である」(水野、1997: 57)とするのである。超越的意味が存在するということは、人がものを考えるときに、その言語を使って考える言語が思想に何らの影響を与えることはないという考えだということになる。

(水野、*ibid.*)は、このコンテキストでは言語と思考との関係についてのサピア＝ウォーフの仮説にいっさい触れていない。しかし筆者は、この仮説の観点からこの「意味の理論」およびその批判を見るのも一法ではないかと考えている。

言語と思考との関係について、サピア＝ウォーフの仮説を近藤、(1989)でいささか論じたことがある。これは、言語相対主義とも言われ、ある言語を母語とする人の認識・思考はその言語によって影響されるという説である。ドイツから移民したアメリカの言語学者サピアがこのような考え方に断片的に触れたものを、その弟子であったウォーフがこの命題をはっきり述べた。同様の考えはドイツの M. フンボルトにも、あるいはおなじくドイツの哲学者(後イギリス亡命し、さらにスウェーデン、アメリカに渡る)カッシーラ(Ernst Cassirer)にも見られる。当然のこと、反論もあって、人の認識・思考は言語から独立したものであるとする論者もいる。

この仮説には「言語が思考を規定する」とする強い解釈と、言語が思考に「影響を与える」という弱い解釈があるとするペン(ペン)による整理が分かりやすいと筆者は考えている。

単純な例を出せば、虹である。色のスペクトルは連続した色のつながりであるが、日本語で「虹は7色だ」と言うのを意識してこれをみれば、たしかに7色に分けて見えてしまう。英語では虹は6色からなっていると言われ、そもそもそのように見た人たちがいたということが面白いし、このように言っているのを生まれてからずっと聴いていて虹をみれば、たしかに6色にみえてしまうのであろう。ティブ語では色を表すことばは3つしかないと言われる。つまり、「われわれは母国語の敷いた線にそって、自然を切り取」っている(Whorf, 1956: 213; 近藤、1989: 47)。

また、英語で話している、あるいはものを書いていると、そのパラグラフの構成の原則から、初めに結論を書き、その説明・例・但し書きなどをその後につけるという書き方になってしまうが、日本ではその逆に、いくつかの説明・例・但し書きなどを初めにあげて、最後に結論をもってくるというパターンのお話し方・書き方をしてしまう(近藤、1980)。つまりわれわれは、母国語の敷いた線にそって、自然を切り取るだけでなく、「言語の体系自体が実は概念を形成し、個々人の精神活動や、単なる印象を分析するとか頭の中につまっているものをまとめる作業をする際に、枠組みや手引きを提供するものなのである」(Whorf, 1956: 213; 近藤、1989、47 ページ)。とすれば、人は、使っている言語の敷く路線に従ってものを考え、表現していることになる。このように言えると筆者は考えている。

こうした整理をすれば、弱い仮説は多くの言語学者に受け容れられているようである。また、サ

ピアは「言語なしにものを考えられる、それどころか論理をつきつめられるという人もいるが、それは幻想である」(Sapir, 1921: 15) としている。「言語は自分の考えていることを表現する手段にしかすぎないなどと思っていると、実はその言語が自分の思考をかなり決めていく側面がある」(近藤、1989: 49)ということになる。

このような整理の仕方に意味があるとすれば、セレスコヴィッチ批判はこのようになる——セレスコヴィッチが、通訳者は<意味>を把握したら元の発言を非言語化する (deverbalize) と述べているのは、サピア=ウォーフの弱い仮説さえも否定することになる。言語なしに、この<意味>をしばらくの間、保持できると考えていることになる。これは、サピアの言うように幻想である、と。

3.2 非言語化論の擁護＝非言語化論批判への反批判

たしかにセレスコヴィッチは、すでに述べたように deverbalize するという過程について「ただちにかつ意図的に wording を捨てる」としているし、この後に通訳者が保持するものを mental representation (心的イメージ) とする (Seleskovitch, 1978: 9)。これを素直に考えれば上の水野および諸論者の deverbalization 批判を認めざるをえないように見える。しかし、以下のように考えることはできないであろうか。

3.2.1 非言語化とは decoding (復号化)

まず第 1 に、話し手は自分の伝えようとする<意味>を verbalize して表現するとするから、通訳者は<意味>に戻るために deverbalize するのだということになる。ここで deverbalize する、非言語化すると言うと、まるで通訳者は<意味>を把握したあと、言語を捨ててしまふ、言語なしにその<意味>を保持するのだという印象を与えてしまふ。しかし、キルヒホーフは das Gemeinte を verbalize するとはせず、encode するとしているし、このように表現するのはキルヒホーフだけではない。

つまり話し手の使用する言語を code と見て、その code に入れてこれを表現するというのである (思っただけで伝わるのは telepathy であろうが、今はこれについては考えない)。このように言ってみれば、通訳者はいったんコード化されて表現されたものを非言語化するのではなくて、decode (復号化) する、つまり code に託されたものを解読することになる。復号化して、話し手の伝えたい元の<意味>に到達する。社会文化的要因、あるいは話し手の文化・言語・育ち・教育・時の問題意識などが背景となってこの<意味>を形成していた、この意味に到達するのである。だから、復号化して<意味>に戻っても、ここにはその言語(など)が一定の影響を与えて形成され、その言語を用いて表現された<意味>がある。

とすれば、話し手は考えていることを言語という code に入れる、つまり encode (符号化・記号化する) としてもよい。verbalize つまり encode すること、そして、deverbalize すなわち decode することではないのか。いろんな code の中の特定の言語(および時間・場所・ジェスチャーなど沈黙の言語)に、つまり「ある言語というコードの中に、伝えたいことを入れる」、その code に encode する、つまり verbalize するのである。そして、encode されたもの、あるいは verbalize されたものを decode あるいは deverbalize するのである。そして、encode したものをそのコードから元にもどしても、言語を捨てることにはならない。

ここで verbalize=encode されたものを耳にした者は、それが自分の知らない言語ならばただの音

であるが、それが自分の理解できる言語なら、これを聴いて、話し手がどのようなことを伝えたかったのかを理解できる。通訳者はこの言語(起点言語)を理解できるので、その<意味>が理解できる。コード化されたものをもとに戻す、あるいは verbalize されたものを deverbalize するのだから、通訳者はこのときに decode しているのだ。これを de-verbalize しているとセレスコヴィッチは述べた。しかし、このことの中身は、言語から独立した<意味>を把握してそれを保持するのではなく、言語に表された元の内容に戻る、言語を伴った、元の<意味>を復元する作業だとは言えないのか。

したがって、この decode という作業によって得られる話し手の伝えたいことは、サピア=ウォーフの仮説の「弱い仮説」をいささかでも認めるとするならば、その伝えたいものは言語超越的なく意味>ではなくて、話し手の使った言語を介して形成されたものであり、話し手はその言語になんらかの影響を受けている。あるいは、すでにウォーフを引いたように、ここでも「言語の体系自体が実は概念を形成し、個々人の精神活動や、単なる印象を分析するとか、頭の中につまっているものをまとめる作業をする際に、枠組みや手引きを提供するものなのである」(Whorf, 1956: 213)。通訳者は話者の使ったコードを理解できるので、そのコードにいったん encode された内容を、decode することによって、元の<意味>を理解している。そして、この言語というコードは人の思考に最低限、影響は与えると考えることができる。つまり、言語の相対性の弱い解釈を認めるということである。この<意味>は言語超越的・言語独立的・中間言語的なものではなく、話し手が思考するときを使い、表現するときに使った言語である。

通訳者はこのように decode すること、このコードが言語なら、一度話し手が verbalize したものを de-verbalize することによって、どのような内容が発信されたのかを理解できる。とすれば、この deverbalize という過程は、いったん表現された内容から「言語を捨ててしまう、だからそこに言語なしに思想が存在する」ということではなくて、単に伝えようと思ったことの内容に戻すという過程だということになる。元の概念・思想・アイディア (semantic content) などの<意味>があったのなら、deverbalize することによって元々あった概念・思想・アイディアに戻ってこれを把握できたというだけのことではないか。

このように考えれば、deverbalize するとは別に文言をすててしまうこと、あるいは言語を脱することではなくて、もともといったん verbalize されたものを元に戻す、つまり、このコードを表現した人が伝えようとしたことに戻る、そしてその内容が分かるということになる。それが、セレスコヴィッチの言った deverbalize ということだったとは解釈できないであろうか。

3.2.2 伝えたい概念の性格によって<意味>の連続の中に位置づける

ここで通訳者の到達したものは話し手の社会文化的背景やその言語で練られた概念であり、このような概念の内容を得ただけでは通訳者の仕事をし終えたことにはならない。通訳者はそれから、話し手の使った起点言語で表されたものを目標言語で表さなくてはならない。どうしたらこれができるのか？ 中間言語でそれを表して、あるいは雲のような amorphous なイメージにして、それを目標言語に encode することになるのか？ あるいは、起点言語で考えられていることを瞬時に目標言語に転換できるのか？ それは単語の辞書的な言い換えになってしまうのではないのか？

このことを考える上で大きな役を果たすと思われるのが、ポエヒハッカーのいう「<意味>を連続したもの、あるいは gradation として捉える」方法である。本年 6 月～7 月のポエヒハッカー氏とのメ

ールの遣り取りで、彼は以下のように提案する。この連続においては「だれかがあるものを高く評価した場合、それが brilliant, excellent, fabulous, terrific などの形容詞を使うのであろうが、わたくしならこの時の気持ちを瞬時に把握するが、ほんの数秒後には実際に使われたことばは忘れてしまう」。このようなく意味の場合には、ほんとうにここで使われた文言を忘れてしまっているし、通訳者はたいてい忘れてしまう。

また、文化的に出来上がった表現の場合、元発話で使われた単語を覚えていても意味はないことが多い。He wears two hats. と英語ではいうが、ここで hat という単語が使われたことを覚えている必要もないし、たいていは覚えていない。日本語が目標言語なら、「二足のわらじを履く」とするしかない。Switzerland is armed to the teeth. では「歯」は関係ない。しかしこの種の表現では元の単語を忘れられないものもある。目標言語に、表わされたもの全体を表す表現がないことがあるからである。たとえばドイツ語の Zeigeist は英語で spirit of the time と訳されることもあるが、そのままドイツ語を使うこともあり、日本語でも「時代精神」という訳語もあるが、原語の全体像を示すために「ツァイトガイスト」とされることもある。同様に、日本語の単語がそのまま英語の語彙に含まれるようになったものもある。「ひばち」は hibachito とされているし、wabi も haiku も英語の語彙にある。

しかし、さらに異なる範疇のく意味もある。連続の逆の極にあるものとしてポエヒハッカーは、固有名詞(これを通訳者は忘れてしまっはいけないし、別の単語で表してもいけない!) や新語で決まった表現のあるものをあげる。また、ある学問で日常用語を鍛えて厳密に定義して専門用語に育て上げ、それを駆使して表わされる概念がある。簡単な例を出せば、GDP growth rate in nominal terms と GDP growth rate in real terms という場合、nominal はただ単に「名ばかりの」「名義だけの」「有名無実の」という意味ではないし、real は「ほんとうの」と訳したのでは不十分である。nominal は「インフレ率をそのまま含んだ」値であり、real は「インフレ率を差し引いた」値だという、経済学で厳密に定義された意味で使われているからである。それぞれ「名目成長率」と「実質成長率」としなければならない。また、GDP の G は gross だが、これは単に「大きい」とか「粗末な」、「おおまかな」などの意味ではなく、「減価償却分を差し引いてない」という意味である。このような元の単語の意味から離れてく意味を把握することはできない。そして、このふたつの極の間に、じょじょに変化していく無限のく意味の連続がある。

この中間にあって複雑な分析を要するのは、たとえば I have a suspicion. である。この場合、suspicion という単語を離れてこの表現の分析もできないし、したがってく意味も把握できない。こうなると suspicion にはどのくらい強い意味があるのか、その中で、ここでは話し手はどのあたりの意味でこれを使っているのかなどと考えざるをえない。

このように考えると、単純に deverbalization は全面的におかしいとか、その逆に、まさにそれが実際に通訳者のしていることであると言い張ることの意義が薄れてくるのではあるまいか。そして、現場の通訳者の役割は、当該のく意味がこの連続のどこに位置しているのかを(無意識であろうが)精密に図って、ときには適切に文言を忘れ、ときには適切にもとの文言をそのまま目標言語で再現することであり、この判断が適切に行われていれば、聴いていて聴きやすく、しかも「正確な」日本語になりうる。日本で定訳になっている訳語を使うのは、後者の場合である。しかし、この判断が間違っていれば、聴くに堪えないような、mutilated (ずたずたにされた) 日本語が end product として出てくることになる(これは、すごい勢いで出てくるので、「絢爛豪華」に見え、聴く方があつけにとられることがある)。つまり、一概に「文言はすべて忘れなさい」、あるいはその逆に

「すべての文言をそのまま目標言語で表しなさい」と言って済ませられるほど単純な仕事を通訳者はしているのではない、とも言えよう。

しかし、セレスコヴィッチをていねいに読むと、たとえば、most of the words that were uttered and all of the sounds which shaped the tone of the statement are blotted out in the memories of both speaker and listener, and only the meaning which they conveyed lingers on. (p. 16)としている。most of the words が消されるので、all the words が忘れられるのではない。つまり、そもそもすべての単語・表現を忘れてしまうとセレスコヴィッチが言ったわけではないのだ。ただし、ここで例外とすることば(そのまま目標言語に移すことのできる単語)の中身が、英仏語間のばあいと日英語間のばあいとは違うということになる。このことはこの文の「下」で論じたい。

3.2.3 社会的文化的要因

キルヒホーフの3者2言語モデルでは、話し手の社会的文化的背景がその発話の裏にはあるとし、近藤版3者2言語モデルでは、話し手は、「その文化内における全体験・学習・生まれながらの資質を背景にして、その時の立場・問題意識に基づいてある概念を伝えようとする」としている。つまり、このような大きな背景のもとでその概念を練り、それを表現するのである。こうした背景すべてが、ここで形成された概念に影響を与えているということである。

つまり、サピア・ウォーフの弱い仮説は、言語が思考に影響を与えると言うが、キルヒホーフおよび近藤モデルは、言語どころか、文化的背景のみならずその時の話し手の立場・問題意識(たとえば、「自分は経営者代表という立場であり、ここでは、このことを強調したいのだ」ということ)もが伝えようとする概念に影響を与えようことをその理論に取り入れている。通訳者はこのような話し手の背景まで理解しようとして、日ごろの鍛錬を怠らない。高度の一般的背景知識を得ようとして、同じ会議でも特定の年の会議では何が大きな問題になっているのか、特定のセッションの発言者は誰なのかなどについて、厚い報告書に目を通し、関連資料を精査する。

現実の通訳者の仕事の中では、話し手の伝えようとする概念の形成に言語が影響を与えているどころか、それよりはるかに広範な要因が影響を与えていることを理解しなくてはならないと言える。と、筆者は考えている。(以下次号)

【著者紹介】

近藤正臣(KONDO, Masaomi)大東文化大学名誉教授、日本通訳翻訳学会初代会長

【参考文献】

近藤正臣 (1980) 「異文化間コミュニケーションの目差すもの」『大東文化大学紀要<社会・自然科学>』第18号, pp.1-14.

近藤正臣 (1989) 「異文化コミュニケーションの意義」『言語・文化・発展途上国—社会科学複眼思考—』北樹出版 pp.44-83.

ポエヒハッカー, F. (鳥飼久美子監訳) (2008) 『通訳学入門』みすず書房

ペン, J. (有馬道子訳) (1980) 『言語の相対性について』大修館書店

水野的 (1997) 「『意味の理論』の批判と通訳モデル」『通訳理論研究』第13号;2004、『通訳理論研

究論集』、pp.107-122 に再録

- Kondo, M. (1990). 'What Conference Interpreters Should Not Be Expected to Perform,' *The Interpreter's Newsletter*, No. 3; (近藤正臣、1992、「通訳者に頼るべきでないこと」、『通訳理論研究』第3号)
- Lederer, M. (2003). *Translation: The Interpretive Model*, (tr. by Ninon Larche) Manchester, UK & Northampton MA: St. Jerome Publishing.
- Poehhacker, F., *e-mails to M. Kondo* on 28 June, 30 June, and 30 July.
- Seleskovitch, Danica, (1968). *L'interprete dans les Conferences Internationals: Letters Modernes*; English tr. by Dailey S. & McMillan, E.N. (1978), *Interpreting for International Conferences – Problems of Languages and Communication*, Wash., D.C., Pen and Booth. (ダニツツァ・セレスコヴィッチ(ベルジユロ伊藤宏美訳) (2009) 『会議通訳者—国際会議における通訳』研究社)
- Sapir, Edward (1921). *Language – An Introduction of the Study of Speech*. N.Y.: Harcourt, Brace & World, HBJ book edition.
- Whorf, B. L. (1956). *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*, (ed. by Carroll, J.R., Cambridge: The MIT Press.)